

【試し読み】

新天理図書館善本叢書

第27巻 奈良絵本集 5

(2019年8月刊行・八木書店)

解題

金光桂子・石川透

※本書の詳細は下記サイトをご参照ください。

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/509>

※解題中の参考図版は非表示にしております。

『奈良絵本集五』
解題

石川 金
透 光
桂子

いはやものがたり

装訂 袋綴 上下二冊

表紙 濃紺色表紙。見返しは表裏とも打曇の紙に、花束風にしつらえた四季の

花（上册：桃／杜若、下冊：萩／水仙）を極彩色で描く。

料紙 鳥の子紙

法量 縦三一・五cm×横二四・三cm

外題 下冊の表紙左肩、題簽の表層が剝落した紙に「□□やものかたり 下」

と墨書する。上册は題簽の表層が剝落した紙のみ残る。

墨付 上册三十四丁半、下冊三十丁半。

行数 七行／十六行

字高 約二七・二cm

挿絵 上册半丁二十三図、見開六図。下冊半丁十一図、見開十一図。

箱書 螺鈿を施した黒漆塗の箱に『花鳥風月物語』『熊野の本地』⁽¹⁾とともに収め

られ、箱蓋に「花鳥風月一・熊野本地二／岩屋草子二」と記した紙片を貼付する。

極札 下冊見返し左肩に「南都連哥師紹九 いはやの物語／下巻冊（朱印「見室」）」と記した極札を貼付する。

書写年次 「室町時代末期」写

（請求記号九一三・五一イ一四一）

本書の伝来については、中尾堅一郎氏による報告がある⁽²⁾。それによれば、泉州の旧家に伝わる「秀頼殿下御下り物」という古文書に、「恵かけ本」として八点の書名が挙げられており、そのうち「いワヤ 二」とあるものが本書にあたるという。同文書には、現在本書と同じ箱に収められている「花鳥風月」「くまのの本地」の名も見られ、昭和二十四年、三点ともに天理図書館の所蔵となった由である。豊臣秀頼という貴顕の手にあったとされる本書は、それにふさ

わしく、全頁の半分以上を挿絵が占める、非常に豪華な大型の奈良絵本である。挿絵は極彩色で細密に描かれており、一見白く塗られているだけのように見える着物や襖にも、雲母のような光沢のある絵具で格子縞や草花の模様が施されている（上・六丁裏、八丁裏など）。挿絵には画中詞の形で登場人物の台詞や場面面の説明が豊富に書き込まれているため、挿絵と画中詞を眺めるだけで物語のおおよそを理解できるほどである⁽³⁾。なお古筆家によって本文筆者に比定されている南都の連歌師・紹九とは、春日社家の流れを引く大東正云の息で、紹巴の弟子であった人物という。

本書の本文は『室町時代物語大成』二に翻刻されているが、ノドにあたる部分の文字が読めず、欠字になっている箇所がある。今回の影印では旧善本叢書と同様、本の綴じを外して撮影したことにより、その部分の本文が判明した。

※『室町時代物語大成』二・五〇二頁・上段八行目／本書下冊・二十九丁表
□□よになきことを： ↓ うらめしや、きたのかた、よになきことを：

『室町時代物語大成』の翻刻には他にも欠字になっている箇所がいくつか見られるが、その多くは絵具の上に文字が書かれ、絵具の剝落とともに文字も落ちてしまったものである。

さて、本書『いはやものがたり』は、一般に『岩屋の草子』の名で知られる室町物語である。『岩屋の草子』は『住吉物語』等の系譜を引く王朝物語型の継子物に分類される作品で、主人公の名をとって「対の屋姫物語」と題されることもある。

物語のあらすじは以下のようなものである。

（上册）堀川中納言と白川姫君との間に生まれた姫君（対の屋姫）は、容貌・才覚ともに人にすぐれていた。姫君が八歳の年、母親が急逝する。三年後に父親は新しい北の方（継母）を迎える。対の屋姫は四位少将と婚約したが、十三歳の年、大宰帥となった父親に伴われて筑紫へ下ることになる。

船旅の途中、明石の浦に停泊した夜、父親が対の屋姫ばかり偏愛すること
を妬んだ継母は、侍の佐藤左衛門に命じ、姫君を海に沈めようとする。佐
藤左衛門は対の屋姫を小舟で連れ出したが、取り乱すことなく静かに経を
誦む姫君の潔い態度を見て、殺すに忍びず岩の上に置き去りにする。その
後対の屋姫は、通りかかった海人に助けられ、明石の岩屋で養われること
になった。一方、船では対の屋姫の姿が見えないというので大騒ぎとなる。
婚約者の四位少将は悲嘆のあまり出家し、父親は泣く泣く筑紫に下る。継
母に對の屋姫の亡母が邪気となつて取り憑き、継母の悪だくみをほめか
すが、真相に気づく者はいない。三年後、任を終えた父親は帰京する。

(下冊) 殿下の息二位中将が、伊予へ湯治に行った帰りに嵐に遭い、明石に
漂着する。岩屋をのぞき見た中将は、対の屋姫を見せめ、盗み出すよう
にして都へ連れ帰る。中将の母北政所は、中将がもとの北の方を離縁して
賤しい海人の子を寵愛していることを嘆き、対の屋姫を満座の中に呼び出
して嘲笑しようとする。約束の日となり、人々の前に現れた対の屋姫の容
姿と知識教養は、中将の四人の姉たちをはるかに凌いでおり、北政所も感
嘆するばかりであった。嫁として認められた対の屋姫は、中将との間に二
人の子を儲ける。その子どもたちの袴着の席で、対の屋姫は初めて自分の
素姓と継母によって明石に捨てられた経緯を語り、父親と涙の再会を果た
す。悪事が露見した継母は離縁され、悲惨な末路をたどった。一方、明石
の海人夫妻は都に召され、数々の褒美を賜った。その後、対の屋姫は一族
ともども繁栄し、長寿を保って往生の素懷を遂げた。

継母の奸計によって流離を余儀なくされた姫君が、男君に見出されて都に戻
り幸せを得るといふ筋立ては、王朝物語型の継子物の典型的なパターンであり、
『伏屋の物語』『秋月物語』など類例は多い。ただし『岩屋の草子』では、もと
の婚約者であった四位少将ではなく、二位中将という別の男君によって対の屋
姫が救出されており、物語の前半と後半とで男主人公が交代する点に独自性
が見られる。文永八年(一二七二)成立の物語歌撰集『風葉和歌集』によって、

「いはや」といふ散逸物語の存在が知られ、現存『岩屋の草子』はその改作と
考えられている。散逸「いはや」は、登場人物も多く現存『岩屋の草子』より
複雑な物語だったと目され、『岩屋の草子』における男主人公の交代はその名残
であるかもしれない。⁽⁴⁾

また、海に沈められそうになった対の屋姫の毅然とした態度が佐藤左衛門の
心を動かしたり、後半、北政所らに試された時にも堂々とした振る舞いによつ
て一同を感服させるなど、男君の援助や神仏の靈験に頼るばかりでなく、女主
人公自身の力によって危機を脱してゆくという面が、他の同類の物語と読み比
べた時に強く印象に残る。なお後半の、対の屋姫が人々の前で美貌と教養を披
露する場面は、『鉢かづき』など民間説話型の継子物に見られる「嫁くらべ」の
趣向を取り入れたものである。

このように自らの資質を生かして苦難を乗り越え幸福に至る姫君を描いた
『岩屋の草子』は、主に女子向けの読み物として、あるいは嫁入り本として重
宝されたらしく、絵巻・絵本の類から刊本に至るまで、相当数の伝本が残って
いる。松本隆信氏は、それらの諸本を大きくA類・B類と分類している。⁽⁵⁾ その
うちB類は、二位中将が登場させず最後まで四位少将を男主人公とする点で、
他の諸本とは大きく異なっており、異本系統と位置づけられるべきものである。A
類に属する諸本は、さらに古本系統・流布本系統に二大別される。両者の間に
筋立ての違いはほとんどないものの、表現上の異同はかなり大きい。本文の前
後関係も複雑に入り組んだ様相を呈しているが、おおむね古本系統から流布本
系統へという流れは認められる。古本系統の中では、特に大東急記念文庫蔵絵
巻⁽⁶⁾が古態をとどめるとされる。流布本系統は刊本を中心とする諸本である。⁽⁷⁾

本書もA類の一伝本だが、和歌の数や本文の異同を子細に見ると、古本系統
と流布本系統の特徴を併せ持っており、二つの系統のいずれにも属さない、両
者の中間的な本文と位置づけられる。もともと、両系統のいずれもが有する本
文を、本書のみ欠く場合もあるため、古本系統↓本書↓流布本系統と、直線的
に並べることができるわけではない。それにしても、古本系統から流布本系統
へという本文の変遷を考える上で、本書の本文が極めて重要な意味を持つこと

は間違いない。

本書と同類の本文を持つ伝本としては、ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション所蔵の奈良絵本⁽⁸⁾が夙に知られている。本書とスペンサー本の類似性は、本文ばかりでなく挿絵にも及んでおり、画風は少々異なるものの、挿絵の位置から画面の構図、そこに書き込まれた画中詞に至るまで酷似している。ただし、本文を子細に対照すると、本書とスペンサー本それぞれに誤脱と思われる箇所が見える。いずれかが他方を直接写したというわけではなく、同じ祖本をもとに作られた兄弟関係と見なすのが妥当であろう。

本書とスペンサー本とのもう一つの共通点として興味深いのは、本文の文字の配置にも工夫が凝らされていることである。書誌に記したように、本書の本文行数は頁によってかなり差があり、頁ごとに文字の大きさも自由に変えられているが、そればかりでなく、行頭が徐々に左下がりになるよう記したり（上・五丁裏など）、流れるような散らし書きにしたり（上・十四丁裏など）、蝶の羽のような形に文字を配置したり（下・二十八丁裏）と、物語本文の部分も視覚的に楽しめるようになっているのである。スペンサー本にも、本書とまったく同じ意匠というわけではないが、同じような特徴が見られる⁽⁹⁾。

ちなみに、本書の蝶型に文字が記されている頁、すなわち下冊二十八丁裏の影印を見ると、行頭・行末に沿って斜めに、白っぽく細い線の引かれていることがわかる。これは籠のようなものであらかじめ印をつけ、文字を記す際の目安にしたものと思われる。こうした線は、下冊には他にも何箇所かに見られるが（十二丁表・十五丁表・二十二丁表・二十四丁表・二十七丁裏・二十九丁裏）、上冊には認められない。本文部分における装飾性の追求が、下冊に至ってより意図的・計画的に行われるようになったということであろうか。

本書やスペンサー本と類似する奈良絵本や絵巻は他にもいくつか制作されていたらしく、その断簡が二点知られている⁽¹⁰⁾。さらにもう一点、愛知県立大学長久手キャンパス図書館所蔵の奈良絵本⁽¹¹⁾を、同類の本として付け加えておきたい。愛知県立大本は、本書とスペンサー本との近さに比べれば、本文・挿絵ともにやや距離が大きいものの、挿絵の位置や構図などには、両本との関連性が認め

られる。ただし愛知県立大本の挿絵には、画中詞がまったくない。その代わりに、本書やスペンサー本の画中詞にあたる文章が、物語の本文中に取り込まれているところがある。

一例を示そう。次に掲げる文章は、岩の上に置き去りにされた対の屋姫を海人が発見する前後の場面の、愛知県立大本の本文である（イ）（ロ）（ハ）は私に付した。

（イ）さては此世ましまさぬは、御ぜん、何とていきさせ給ふやらん、たゞうきめをながくとみんよりも、とくくとむかへさせ給へと、きせいしてぞおはしましける。（ロ）あかしのあまが申やう、此いはのうへには、いかなる人にてましませば、おはしけるやらん。まづ舟こぎよせて見候はんとおもひて、ふねこぎよせけり。たいの屋のひめぎみは、なみだのひまより御らんじて、うれしく又おそしくこそおほしめしけれ。（ハ）つりのふねとおほしくて、あまた見えけれ共、よせてこととふ人もなし。五日と申くれに、あかしのあま、しほのひるまをうかゞひて、おきへいでたりけるが、いはのうへをみれば、あふぎのゑにこうはいのやうなる人こそ見えさせ給ひけれ。（後略）

この文章を読むと、（ロ）においてすでに、岩の上に人の姿を認めた海人の反応やそれに気づいた対の屋姫の思いが語られているにもかかわらず、（ハ）で改めて、海人が沖に舟を出すと岩の上に美女がいたという経緯を述べており、叙述の前後が食い違っているように思われる。

この部分は、本書では上冊の二十八丁裏と二十九丁表に該当し、文章に小異はあるものの、本書でも確かに（イ）（ロ）（ハ）の順に並んでいる。しかし本書によれば、（イ）（ハ）は物語本文だが、（ロ）は画中詞として記されているのである（二十八丁裏・五行目以降）。つまり、海人が対の屋姫を発見する場面の挿絵が、その内容を記す本文より前に描かれたため、（ロ）の画中詞が（ハ）に行する形になっているのだが、本書のような形態であれば、画中詞を本文と別

物と見なすことができるため、それほど大きな違和感はない。愛知県立大本は、本書に近い形態の本をもとに、本文と画中詞とを区別することなく一続きに写してしまったため、このように不自然な形になったのであろう。愛知県立大本制作時のミスといえればそれまでだが、逆の見方をすれば、本書のように画中詞を多量に含み、かつ挿絵の頁に本文が入り込むことも珍しくない形の本においては、時に本文と画中詞との区別が大変紛らわしいということを示唆する現象でもある。それは、この箇所に限らず、本書・スペンサー本の全体にわたっていえることである。

挿絵の頁において本文と画中詞とが混在するのは逆に、本書では、本文中に画中詞が割り込むこともある。物語の終結部に近い、下冊二十九丁裏は、前述したような本文の配置における装飾性が特に顕著な頁で、文章が五つの部分に分かれて記されており、読者は中央部↓右上部↓左上部↓右下部↓左下部の順に進めることになる。そのうち右下部の二行目までは確かに物語本文と考えてよいが、三行目から左下部、さらに次頁の三十丁表まで続く一文「あま申やう、かやうの御ことをばゆめにもしりまいらせず候て、あけくれ二人、なみだをながしまいらせて候ぞや」は、本来画中詞であったと思われる。ここは海人夫婦が都に召され対の屋姫と再会する場面であるが、この場面における海人の発言は他系統の諸本には存在しないし、文体も画中詞にふさわしい。スペンサー本にはほぼ同様の一文があるが、すべて挿絵の頁に記されており（下・三十八丁裏）、画中詞であることが明白である⁽¹³⁾。察するに、中央部の菱形を四つの三角形が取り囲むような形で本文を配置すると決めて書き進めたものの、本文だけでは文字が足りず、画中詞まで借りてきたということであろうか。そうだとすれば、本文と画中詞とを明確に区別すること以上に、視覚的な装飾性の方が優先されたということになる。

また、本書とスペンサー本の本文は、細かな異同や単純な誤脱を除けばほぼ同文といってよいところが大半なのだが、本書の下冊二十三丁裏〜二十四丁表にあたる部分のみ、例外的にやや大きな異同が見られる。他系統の本文と対照すると、本書の本文の方が本来の形に近いようで、スペンサー本は大意を変え

ることはないものの、全体的に文章を短縮・簡略化している。その改変には、本文を記すスペースの問題も関わっているかと思われる。つまり、本書では二頁分をこの箇所の本文にあてているが、スペンサー本では一頁分しかなく（下・三十二丁裏）、本文の一部は次の挿絵の頁にも進出しているものの、本書よりはずっと少ないスペースに、同じ内容が書き込まれているのである。スペンサー本に例外的に異文が生じた理由としては、他本の本文との接触などより、こうした物理的な要因を考えるべきであろう。

ただし、本書で二頁分の本文がスペンサー本では一頁に書かれる例、あるいはその逆の事例は、他にも何箇所もあり、多くは文字を小さく詰めて書くことで調整されている。同様の処置は挿絵にも見られる。本書下冊には、二つの場面を同じ頁に描く挿絵が二箇所ある。六丁表（岩屋の中の中將と対の屋姫／対の屋姫を連れ出す中將）および九丁表（中將と対の屋姫／中將と北政所）であるが、スペンサー本ではいずれも二つの場面が別の図として、二頁に分けて描かれている。本書ではこうした異時同図の挿絵はこの二箇所のみであり、何らかの造本上の都合で、二頁分の挿絵が一頁にまとめられたものと思われる。その結果、中將が対の屋姫を盗み出す場面では、海人夫婦を木に縛りつけておき（五丁裏）、その際に中將が岩屋を訪れ、家臣に對の屋姫を背負わせて逃げる（六丁表）という一連の場面が、見開きの左右に描かれることになった。偶然の産物だったとしても、急展開する物語をよりスピーディに味わうことができるという点では、効果を上げているといえよう。

以上、本書および同類の奈良絵本について、本文・挿絵・画中詞にまつわるいくつかの問題を指摘してきた。本文と画中詞との区別が曖昧であったり、スペースに合わせて本文を改変したりといった特徴からは、物語本文を正確に伝えること以上に、絵本としての完成度を重視する姿勢が垣間見える。もとよりそういった姿勢は本書やスペンサー本に限られることではないであろうが、奈良絵本の制作や物語の享受に関わるさまざまな興味深い現象を提示してくれる点でも、本書は価値の高い伝本なのである。

【注】

(1) 『花鳥風月物語』『熊野の本地』は、それぞれ本叢書『奈良絵本集』六・七に収録予定。

(2) 中尾堅一郎「奈良絵本との出会い」(『天理図書館善本叢書』月報三三、一九七七年三月)。

(3) 徳田和夫「物語文学と奈良絵本」(『お伽草子研究』三弥井書店、一九八八年)。

(4) 松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語(続)——伏屋」「岩屋」「一本菊」外——(『斯道文庫論集』五、一九六七年七月)。

(5) 前掲注(4)。以下、諸本の分類と本書の位置づけについては、同論文のほか、同じく松本氏による本書の解題(天理図書館善本叢書『古奈良絵本集二』八木書店、一九七七年)および「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年)を参照した。

(6) 『室町時代物語集』三・新潮日本古典集成『御伽草子集』・新日本古典文学大系『室町物語集』上に翻刻がある。

(7) 寛永頃刊の絵入刊本が、『続群書類従』一八上・有朋堂文庫『御伽草紙』・『室町時代物語集』三などに翻刻されている。

(8) 大型奈良絵本・二冊。奈良絵本国際研究会編『在外奈良絵本』(角川書店、一九八一年)に影印・翻刻・解題(松本隆信執筆)がある。

(9) 本書・スペイン本におけるこうした装飾性については、徳田和夫『「岩屋の草子」初期奈良絵本の風流性——スペイン本、天理本をめぐって——』(人間文化研究機構国文学研究資料館編『絵が物語る日本 ニューヨークスペインサー・コレクションを訪ねて』三弥井書店、二〇一四年)に詳しい分析がある。

(10) 前掲注(9) 徳田論文に紹介される、同氏所蔵の絵巻断簡と、『古書特選善本目録』二五(臨川書店、二〇一三年)掲載の「岩尾イシオの草子」断簡。

(11) 大型奈良絵本・一冊(上冊のみ)。元冊子本だが折本の形態に改装された形で伝わる。愛知県立大学図書館貴重書コレクションに画像が公開されている。

(12) 愛知県立大本には、他にも画中詞を本文化している箇所があるが、本書やスペイン本に見られる画中詞のすべてというわけではない。愛知県立大本のもと

になったのは、本書と類似しつつも、より画中詞の少ない本だった可能性がある。

(13) なお徳田氏が指摘するように、本書下冊三十丁表に描かれている二人の万歳師は、スペイン本挿絵には見られず、本文にも対応する記述がなく、本書独自の絵柄である。また、その万歳師の台詞として記される「あら／＼御めでたや……」以下の画中詞も、スペイン本と比較すると、本来海人夫婦の台詞の一部であったものを転用したことがわかる(前掲注(3) 論文)。

【附記】

貴重書の閲覧をご許可いただきました愛知県立大学長久手キャンパス図書館に御礼申し上げます。

じやうるり

装訂 袋綴 二冊

表紙 打曇表紙

料紙 鳥の子紙

法量 縦三一・七cm×横二三・二cm

外題 左肩丹紙金泥下絵題簽に「じやうるり上(下)巻」と墨書

墨付 上冊二十五丁半、下冊二十三丁半

行数 十一行〜十三行

字高 約二四・七cm

挿絵 上冊半丁七図、見開二図。下冊半丁八図、見開一図。

書写年代 〔室町時代末期〕写

(請求記号九一三・五一イ三六三)

『じやうるり』は、一般的には御伽草子『浄瑠璃物語』と呼ばれる作品である。『十二段草子』という別名があるように、十二段の台本構成を取ることもある。今日、文楽と呼ばれる人形浄瑠璃は、室町時代以降の人形遣い集団が、当時流行していた語り物の『浄瑠璃』を取り入れたことから始まったと言われている。人形浄瑠璃や幸若舞曲といった室町時代成立の演劇は、その詞章が物語草子同様読み物として享受されたことから、多くの絵本や絵巻に仕立てられている。

『浄瑠璃物語』の諸伝本は、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年)の「浄瑠璃物語」によれば、大きく七つの系統に分かれる。また、『浄瑠璃物語』の諸伝本の研究を行った、森武之助『浄瑠璃物語研究 資料と研究』(井上書房、一九六二年)の分類をも参照すると、『浄瑠璃物語』の天理図書館二冊本(以下、本書)は、天理図書館一冊本(以下、天理一冊本)とともに、大東急記念文庫本(大東急記念文庫善本叢刊近世篇別巻

『十二段草子』汲古書院、一九七七年。以下、大東急本)と同系統ということになる。この系統は、『浄瑠璃物語』の初期的な本文を残しているが、ところどころに、同じ種類の単語を並べる、物尽くしが長々と記されることが大きな特徴となっている。

本稿では、『浄瑠璃物語』の中でも、本書と同系統の奈良絵本と絵巻との関係を見ていきたい。

ここで、本書の概略を見てみる。

(上冊)浄瑠璃御前は、三河国の国司を父、矢作の長者という街道一の遊君を母とし、二人が峰の薬師に申し子してできた娘であった。一方、牛若(源義経)は、金売吉次の供として平泉に向かう途中、矢作の宿に着いた。長者の館で姫を垣間見、漏れ来る管弦の音に心惹かれた牛若は、持参の笛を調べに合わせて吹いた。笛の音を聞いた浄瑠璃御前は笛の主を招き入れ、二人は四方四季の豪邸でひとときを過ごす。

(下冊)牛若は宿所へ戻るが、浄瑠璃御前に恋い焦がれ、再び浄瑠璃御前の元へ向かった。二人は和歌や問答を交わして、深く契りを結ぶ。しかし、夜が明け、逢瀬の短さに嘆くも、奥州に向かう吉次の一行として旅路に付いた牛若は、その途中、蒲原の宿で病に倒れるのであった。

この概略からも分かるように、本系統本は、末尾を欠いている。多くの伝本では、この後、牛若は死に至るが、駆けつけた浄瑠璃御前の祈誓により、薬師の利生で牛若は生き返る、という内容が続く。この浄瑠璃御前と牛若の恋愛話の人形劇に仕立てられていたのである。初期の人形劇の具体的な姿は、今日ほとんど残されていないが、伝承地である愛知県岡崎市には、浄瑠璃御前の墓を始め、それにまつわる多くの史跡が残されている。一方で、内容的なおもしろさもあり、古くから奈良絵本や絵巻として享受されていた。

本系統の奈良絵本・絵巻としては、以下の五本を挙げることができる。

天理図書館蔵一冊本 特大型奈良絵本一冊（上冊のみ存） 天正十三年写

大東急記念文庫蔵 特大型奈良絵本二冊 [室町時代末期] 写

天理図書館二冊本（本書） 特大型奈良絵本二冊 [室町時代末期] 写

石川透蔵 特大型奈良絵本断簡二枚 [室町時代末期] 写

ハーバード大学美術館 絵巻二軸 [室町時代末期] 写

石川透蔵本（以下、石川本）は、詞書一枚、挿絵一枚の断簡である。また、ハーバード大学美術館本（以下、ハーバード本）は、かつて、桜井慶二郎が所有していた絵巻と考えられる（小林健二・糸汐里の教示並びに画像の提供による）。

以下に、同系統とされる五伝本の本文を比較してみる。石川本は上冊第二段の断簡であるので、その一部を挙げる。

天理一冊本

たうのまはりにうへおく木は、なにくそ。せたいしゆ、ほたひしゆ、こ
うたうしゆ、ゆのきとかうしと、たちはなと、むめはくにほひをはしめと
し、ききやう、かるかや、おみなへし、あつさい、しもつけ、いわつ、し、
き、く、しらきく、かさねきく、からむめ、からきく、からなてしこ、な
つめとなつゆり、なつこはき、なにをたよりにうきくさは、

大東急本

たうのまはりにうへをく花は、なにくそ。せたいしゆ、ほたひしゆ、こ
うたうしゆ、ゆのきとかうしと、たちはなと、むめはくにほひをはしめと
し、ききやう、かるかや、おみなへし、あつさい、しもつけ、いはつ、し、
き、く、しらきく、かさねきく、からむめ、からきく、からなてしこ、な
つめとなつゆり、なつこはき、なにをたよりにうき草は、

本書

たうのまはりにうへおく花は、なにくそ。せたいしゆ、ほたひしゆ、こ
うたうしゆ、ゆのきとかうしと、たちはなと、むめはくにほひをはしめと
し、ききやう、かるかや、おみなへし、あつさい、しもつけ、いはつ、し、

き、く、白きく、かさねきく、からむめ、からきく、からなてしこ、なつ
めとなつゆり、なつこはき、なにをたよりにうきくさは、

石川本

たうのまはりにうへをく花は、なにくそ。せたいしゆ、ほたひしゆ、こ
うたうしゆ、ゆの木とかうし、とたちはなを、むめのにほひをはしめとし、
ききやう、かるかや、をみなへし、あちさへ、しもつけ、いとす、き、し
らきく、き、く、かさねきく、からむめ、からきく、からなてし、なつめ
となつゆり、夏こはき、なにをたよりのうきくさは、

ハーバード本

たうのまはりにうへをく花は、なにくそ。せむたいしゆ、ほたいしゆ、
こうたうしゆ、たちはなと、むめのにほひをはしめとし、しらきく、きき
く、かさねきく、ききやう、かるかや、をみなへし、あちさへ、しもいと
す、き、からむめ、からきく、からなてし、なにをたよりにうきくさは、

このように、五伝本それぞれに細かな異同が存するが、概して天理一冊本が、
本文的にはよく整っている。天理一冊本は、山崎美成旧蔵で、『耽奇漫録』に模
写される等、古来注目を集めている伝本である。残念ながら上冊のみしかない
が、森武之助・松本隆信ともに、本系統の最善本と位置付けている。

挿絵については、本文以上にそれぞれの差が大きく、数はまちまちであるが、
同じ場面では類似した構図を使用しており明らかな関係が認められる。

以上のように、上記の五伝本は、本文的にも絵画的にも、相互に密接な関係
がある。天理一冊本に記された天正十三年（一五八五）の奥書は、後補との見方
もあるが、ほぼ同時代のものと見受けられる。他の四伝本に奥書は存しないが、
室町時代末期から江戸時代初期に制作された、典型的な奈良絵本である。時代
判定として、ここでは〔室町時代末期〕としたが、研究者によっては、〔室町時
代末〜江戸時代初期〕としたり、〔桃山期〕と称する時期の制作である。

この桃山期作とされる特大型の奈良絵本は、奈良絵本群として最も古く、か
つ豪華な作品が多い。これまで、この桃山期作特大型奈良絵本のまとまった研



(16オ)

(15ウ)



(28オ)

(27ウ)

究はほとんどないが、この『浄瑠璃物語』の本系統本は、同じ系統の本文の奈良絵本・絵巻が五伝本も残り、相互に関係を有することが明らかであることから、室町時代末期の奈良絵本・絵巻の制作や享受を考える上で、きわめて重要な研究ができる作品群なのである。

五伝本は本文・挿図ともに類似した奈良絵本と絵巻であるが、書写という面から見れば、五伝本のうち、本書と大東急本が同筆である。また、石川本とハーバード本も、奈良絵本と絵巻との形の差があるものの、本文が同筆である。五伝本存在しながら、本文は、本書と大東急本、石川本とハーバード本、及び天理一冊本の三人で担当している。また、本書の本文筆跡について言えば、大阪市立美術館蔵『伏見常盤』絵巻（元奈良絵本）も同筆である。

十七世紀半ば以降制作の奈良絵本にも、石川透『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年）等に記したように、本文筆跡については同じ現象が見られ、それらは、絵草紙屋による、大名家等の注文による分業制作を示すものであった。おそらくは、同じような絵草紙屋は、いわゆる桃山期にも存在したのであろう。

本書を含む『浄瑠璃物語』は、初期奈良絵本の制作状況を調べるのに格好の作品といえよう。

（石川透）